

里暮らしの足元を見直すこと

山形県内陸北部、雪深い角川の里にもようやく春が訪れたようだ。雪で白かった大地も日に日に黒い土を露にしていける。山肌ももう半分以上は黒く見えるようになった。この時期は夏には藪に覆われて近づくことができない溪流のポイントに行けるということで、筆者は釣竿を担いで川に行く。春先特有の硬い雪を踏みしめて川のせせらぎを聞きながらの釣はよいものだ。先日は尺物のイワナが、いきなりかかった。まだ水温の冷たいこの時期の溪流魚はとりわけ清らかな美しさを持っているように思える。夜、焼いてどぶろくを飲みながらいただいた。こんなことが日常的にできる農山村の暮らしはやはりよいものだとつくづく感じる。

角川の里に出会ってもう7年目を迎える。住みついて6年目だ。当初村の人々は、「何でこんななんもない田舎に来たんだ」と疑問のまなざしで筆者を見たものだった。しかし、現在では角川の里の人々の意識もよほど変わってきている。それはこの6年間に取り組んできた地元で学ぶ「地元学」の効果だろう。

里の何気ない日常の暮らしの知恵や技術、もの・ことの数々に実はおもしろさやすごさ、価値があったりする。そういったことを角川の人々は、筆者をはじめとした外部者の目線の違いを利用して再発見し、足元を見直すことで自分たちの暮らしを元気にしていくための活動を展開してきた。角川里の自然環境学校という地域運営学校を設立し、住民が先生役となってふるさと学習活動を進め、年間2,000人以上の人々が交流学習に訪れるようになった。おじさんたちが山から木を切り出して加工所を立て、そこでお母さん方が郷土料理や農産物を加工し販売するようになった。成功に結びついたアイディアは、地元を見直し、ないものねだりではなく、地域にどんなものがあるのか愚直とも言えるほどに着実に自分たちで調べていった蓄積をもとにして、自分たちで試行錯誤を重ねながら育てていったものである。

先日、水俣から地元学の提唱者である吉本哲朗氏を招き研修講演会を行った。吉本氏は言う。「何のために地元を見直し調べるのか、それは自分たちが元気に暮らしていくためだ。誰のためでもない、そこに住んでいる里人が自分たちのために調べるのだ。」このことは、角川のまたぎたちが言う「自分たちで生きてきた」という言葉にこめられた東北の農山村で生き抜いてきた人々の暮らしに対する思いと通底すると思う。角川の里人は、自分たちを取り囲む自然、文化、社会環境を経験的によく調べ把握し、それらに工夫をして日々の暮らしに役立て、自分たちの生き方を創り上げてきた。これが結果として懐かしい日本の農村風景を形成してきたと言える。

昨今、農村について「多面的機能」「地球環境の保全」「温暖化防止効果」など、大きなキャッチコピーを用いた語りがされ始めている。確かにそのような広い視点、大きな観点から里の営みを位置づけておくことは大切だろう。そのことが里の人々に公共的な側面から貢献しているという新たな誇りを生み出すことにつながるかもしれない。だが一方で、

農村の持つ機能というものが、何よりもそこに住む人々が「自分たちで生きていく」ための営みの結果だということを忘れてはならない。自分たちが元気にその地域で暮らしていくために調べ取り組む、こうした姿勢を忘れることなく地元をしっかり目を向けながら外部の様々な人々と里づくりをしていくことが重要だろう。そんなことを意識しながら、角川の里は今年も交流と学習の活動が盛んだ。